Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

現代中国をめぐる越境的社会圏の輻輳：資本・労働・環境・市民社会・宗教・民族

浅野, 慎一

(Citation)
日中社会学研究,25:1-4

(Issue Date)
2017-10

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005078

KOBE UNIVERSITY

【特集論文１】現代中国をめぐる越境的社会圏の輻輳：資本・労働・環境・市民社会・宗教・民族

現代中国をめぐる越境的社会圏の輻輳
－資本・労働・環境・市民社会・宗教・民族－

Cross-Border Social Sphere over the Contemporary China

围绕现代中国的越境式社会圈的辐辏

—资本・劳动・环境・市民社会・宗教・民族—

浅野　慎一

内容简介　日中社会学会第 29 次大会・学会所计划的专题研讨会的目的主要就在于检验在以现代中国为首的亚洲地区所展现出来的各种越境式社会圈的实际情况，阐明这些社会圈互相孕育着怎样的异质性和同质性，并阐明这些社会圈是怎样不断辐辏・变化发展的，进而来考察其历史——社会性的意义。以前曾经在社会学上讨论过多种多样的并且在理论・实践上互相孕育出对立的民族性的越境。然而在后殖民地时代的今天，只把国民国家看作为分界线从根本上来说已经过时了。可以说①市场②主权③能力这三点才是现代越境式社会圈的根基，而且也是从根本上规定其根基的难以逾越的真正的界线。

【キーワード】　越境的社会圏　資本　労働　環境　市民社会　宗教　民族

【关键词】　越境式社会圈　资本　劳动　环境　市民社会　宗教　民族

１．現代の越境的社会圏

日中社会学会第 29 回大会・学会企画シンポジウムの狙いは、現代中国をはじめとするアジア地域を舞台として展開する多様な越境的社会圏の実態を検証し、それらが相互にいかなる異質性と同質性を孕み、輻輳・変貌しつつあるかを解明し、その歴史－社会的意義を考察することにあった。

従来、社会学は多くの場合、ナショナルな越境を論じてきた。その視点は、①既存のネイションを前提した“inter-nationalism（国際比較・異文化理解・多文化共生）”、②既存のネイションを否定した階級的連帯としての“international-ism”、③ネイション間の相互浸透を捉える“trans-nationalism”、④ナショナルな枠組みを越えた単一の世界市場・世界システムと見做す“globalism”、そして⑤離散して不断の変容を遂げつつ継続するネイションとしての“diaspora”等、極めて多様である。それらの多くは一見、ネイションを否定・相対化しつつ、否定・相対化すべき対象としてネイションに固執している。

こうしたネイションをめぐる多様な越境は、単に異質であるばかりでなく、理論的・実践的な対立を孕む。一例をあげれば、東アジアの越境的安全保障に一定の影響をもつ日本国憲法の平和主義がある。それは、“international-ism”の立場からは人類的・越境的な平和的生存権の模索だが、“globalism”の観点からは日本の国益や資本蓄積の手段としても是非を論じ得る。“trans-nationalism”ではその理念の他国への浸透が問われ、“inter-nationalism”の視点からは民族解放闘争も帝国主義戦争も同一視して否定する没歴史的な「抽象的命題」（孫歌）、アジア諸国からは到底受け入れがたい「非戦フレーム」（汪宏倫）と見做され得る。“diaspora”の視点から見れば、それ

は世界中に離散する「日本人」の立ち位置・文脈に応じて多様な意味・規範となり、しかしまたそれゆえに統合の一契機たり得る。

ここで重要なことは、こうした多様な立場のいずれが正統かといった政治論争以前に、多様な認知枠に立つアクターが実在し、それらの行為の輻輳が東アジアの越境的社会圏を形作っている現実だ。そのリアルな認識なしに、越境的社会圏の意義や可能性は論じられない。

しかもポスト・コロニアルの今日、ネイションのみを境界と見做すこと自体、もはや難しい。

例えば、自然環境の領域では“universal”な越境もあれば、地域毎に個性的な生物多様性・生態系のように“eco-regional”な越境もある。遺伝子操作やＡＩの技術革新は、生物種・類的存在としてのホモ・サピエンスからの離脱・越境すら視野に入れつつある。

文化･宗教の領域では、世界の何処に行っても、そこが私の生活の舞台といった“cosmopolitan”としての越境もあれば、「記憶」という形をとった時間・空間の越境も重要になる。宗教は多くの場合、現世と彼岸の越境を視野に入れ、その基底には人間（個・人類）の有限性や意識性、及び、自然・宇宙の無限性・無目的性の矛盾を越境しようとする試みがあるだろう。

労働や経済の領域で国境がもはや主要な境界でなくなっていることは自明だが、政治の領域でもそれは進展している。前述の日本国憲法の平和主義についても、戦争の主体自体がネイションとは限らなくなり、国権の発動たる戦争に視野を限定した憲法という一国単位の法規範であること自体が、平和主義の実現の桎梏になる可能性すらありうる。

したがって、越境者は単に“異邦人(foreigner)”・“移民(migrant)”・“diaspora”であるばかりではない。“類的存在(species-being)”、“人(human-nature)”、“放浪者(wanderer)”、“流浪人(vagabond)”、“ノマド(nomad)”等々でもあり得る。ポスト・ホモサピエンスという越境者はしばらくは登場しなくても、“universalist”、“eco-regionalist”、“cosmopolitan”、“species-being”としての越境者はもはや珍しくない。今、世界で政治的焦点となっている移民・難民問題も、それを国境を越えた「移民・難民問題」とのみ認識した時点で、既に本質を看過している可能性は高い。

２．３つの領域と視点

本シンポジウムは、こうした越境論のリスケーリングへの手掛かりを模索する。

同時にここでは、あくまでローカルな実証研究や実践をふまえ、地に足のついた議論を目指したい。俯瞰的な「鳥の眼」だけでなく、現実に密着した「虫の眼」、さらに見逃されがちな周延にも焦点を当てる「魚の眼」を動員する議論が必要だ。

そこで、３つの具体的な領域を設定した。

第１は、自然環境と市民社会で、高見邦雄氏（認定NPO法人・緑の地球ネットワーク副代表）に報告をお願いした。高見氏は四半世紀にわたり、中国山西省の黄土高原で植樹・緑化事業に取り組んでこられた。

第２は、宗教と民族で、滝澤克彦会員（長崎大学）に報告をお願いした。滝澤会員は『越境する宗教』（新泉社）等の著作があり、当該分野の越境を論じる最適任者だ。

第３は、労働と経済で、陸麗君会員（大阪市立大学・同志社大学）に報告をお引き受けいただいた。陸会員は、大阪市西成区における新華僑の経済実践・社会関係をディープな調査によって解明しつつある。

討論者は、水野博達会員（大阪市立大学）、林梅会員（関西学院大学）にお願いした。

それぞれの報告と討論の内実は、本誌に収録された報告者・討論者（水野会員）の論稿を参照されたい。

ただ、司会として筆者が感じたことは、多種多様な混沌とも見える越境的社会圏を通底し、それ

らを根底から規定する真の越え難い境界は、①市場、②主権、③能力の３つではないかということだ。

高見氏は植樹の実践を通して、「日本人」や「中国人」ではない「人間」もしくは「人と人の個人的な関係」としての越境的社会圏を構築してきた。それを可能にしたのは、苛酷な自然とそれに立ち向かう協働だ。言葉・文化・歴史は確かに大きな壁だが、試行錯誤によって越境可能だった。しかし2010年以降、現地の賃金水準・資材費が高騰し、つまり市場によって「人間／個人と個人」の「労働力／消費者」への分断が顕著になりつつあるようだ。また緑化が成功した地域には国家プロジェクトが参入し、ボランティアは他地域に移出しつつあるという。主権による事業は大規模で効率的であろう。しかしそこに高見氏の実践に不可欠だった「人間／人と人の個人的関係」が継承されるか否かは未知数だ。そして自然との苛酷な闘いには、様々な能力――自然を征服するだけでなく、自然に服従する能力を含む――が不可欠である。それは多様な差異・個性を並列的に尊重する安易な多元主義を許さず、様々な意味での無能力者の排除を不可避にするだろう。

滝澤会員は、宗教が地域的境界を越えて拡散・土着するだけでなく、ときとして宗教であること自体を越境し、しかも超人間的秩序の信奉の下での普遍主義に向かわず、強烈なナショナリズムへと連鎖する再帰的近代化の過程を報告した。このようなアクロバティックな越境の成立基盤もまた、グローバルな物質的条件であり、それを支える市場であろう。また世界システム内でのモンゴルという主権（国家）の相対的位置（ポスト社会主義）の文脈を抜きには、理解し得まい。そして「土着化」とは異なる「文脈化」が宗教の本質なるものへの思考、または反省的意識・省察等を不可欠の条件とするならば、そこには信者になる能力が不可欠で、能力によって異なる越境が可能になり、また必然化するのではないか。

陸会員は、貧困な日本人男性を主な顧客としてカラオケ店を経営する新華僑とそのネットワークについて、リアルな実態を報告した。旧来の被差別地域も、グローバル市場の下では安価で便利な低家賃商業地域だ。そこで当事者は、インバウンドの観光客の増加も視野に入れ、逞しく、しかも将来予測が極めて不明瞭な事業を営んでいる。当事者はステレオタイプな低賃金の外国人労働者ではなく、エスニシティや学歴を文化資本として上昇移動を図る中間層移民でもない。公的な専門性・資格とは無縁だが、極めて高度な能力・バイタリティを有し、その能力は市場での成功としてのみ立証される。しかもそれは、不法入国・規則外就労等、主権とのせめぎ合いの中で展開されている。

以上のように、３名の報告はいずれも、ありきたりなネイションの越境を取り扱ったものではない。しかし同時にそれらはいずれも、市場・主権・能力という枠組み自体を越境することなく、それらの境界の枠内での苦闘である。

顧みれば、近代に生きるすべての人々が最後まで乗り越え難い境界は、市場・主権・能力の壁ではなかろうか。言葉や文化としてのネイションは、生活の必要に応じて十分に乗り越えられる。しかし、等価交換・交換価値を前提とする市場という形態以外で、人類はいかなる分業に基づく協働を組織しうるのか。主権を最終的な後盾としない社会秩序は、いかに可能か。そして能力主義を建前とする資本主義的階級は、いかに克服可能なのか。今後、いかなる越境も、この３つの境界といかなる関係にあるのかが問われなければ、その考察の意義は限定的なものにとどまるのではなかろうか。その論点を浮き彫りにした点で、今回のシンポジウムの本質的な目論みは達成されたと言えよう。

〔参考文献〕

浅野慎一，2007，『日本で学ぶアジア系外国人：増補版』大学教育出版、第３部第１章.

浅野慎一，2005，『人間的自然と社会環境』大学教育出版、第２部第３章、第３部第３章.
浅野慎一，2012，「民族解放・国民主権を越えて」『日中社会学研究』20.
浅野慎一・佟岩，2016，『中国残留日本人孤児の研究』御茶の水書房、第７章.
汪宏倫，2014，「東アジアの近代の理論化のために」『思想』1978.
孫歌，2013，「われわれはなぜ東アジアを語るのか」『クァドランテ』15.
高見邦雄，2003，『ぼくらの村にアンズが実った』日本経済新聞社.
高見邦雄，2012，「中国で木を植えつづけて 20 年」『海外の森林と林業』85.
滝澤克彦，2015，『越境する宗教』新泉社
滝澤克彦，2017，「宗教の越境と文脈」『多文化社会研究』3.
陸麗君，2016，「華人・華僑の移住と同郷的なネットワーク」『評論　社会科学』119.

（ASANO, Shinichi ／神戸大学）